

## Armance の成立について

松 原 雅 典

今日 *Armance* を読むものは、*impuissance* という鍵を与えられている。だがこの鍵をもってしても、依然として *énigme* が残る。それは、*impuissance* 自体が *énigme* だからである。この *énigme* は二つの点にかかわっているように思われる。第一の点は、*impuissance* が何を意味しているか明瞭でないこと。第二の点は、主人公は *impuissance* と外部の悪意によって苦しむが、作者がいずれに力点をかけているのか明瞭でないことである。主人公 Octave は確かに *impuissance* によって苦しみはするが、彼が死を決意するのは、悪意の策略によって *Armance* への信頼が崩れたからであり、*impuissance* の解決としてではない。つまり問と答は対応していないのだ。のみならず作者は、俗悪な精神の欠除のみが主人公の不幸の因であるかのようにもほめかしている。この小説は明らかに矛盾した設定の間で揺れており、それが *énigme* をなしているのであるが、この揺れを手掛りにして作品の成立を考察するのが本論文の意図である。

通常 *Armance* の創作は DURAS 公爵夫人の作品の偽作である Hyacinthe Thabaud de LA TOUCHE の *Olivier* に関連づけて説明される。STENDHAL がその紹介文を書き、その直後に創作に取りかかり、*impuissance* の設定が大きな motif として全編を貫いている以上、それは当然である。だが問題は、*impuissance* の状況を借りることが彼にとっていかなる意味をもっていたかということであろう。ところで、*Armance* の成立を考える場合、私にとって見逃しえなく思われることは、彼が《Le 4 octobre 1826 (*the 7th I was absent*). Lisant Édouard je pensais ceci. Faites un supplément à La Bruyère, un La Bruyère du XIX<sup>e</sup> siècle, fort bien;»<sup>1)</sup> と Bucci 本<sup>2)</sup>に書き込んでいることである。これは何を意味するのだろうか。Édouard は *Olivier* の前作に当たり、STENDHAL はそれについて書評を書いているが、私にはそこでの主人公 Édouard の性格づけが Octave にもそのままあてはまり、彼が《Lisant Édouard...》と記したことがいい加減でないように思われる。この書評のある *New Monthly Magazine* は、その号から《Sketches of Parisian Society, Politics and Literature》の表題をもつことになり、Édouard 評の前後で、パリの社交界の風俗、フランスの政情などを描いているが、それは《Quelques Scènes d'un Salon de Paris en 1827》の副題をもつ *Armance* の意図でもあった。

今上記の STENDHAL の Marginalia を普通に解釈して、彼が LA TOUCHE の *Olivier* 以前に、Édouard に触発されて小説の創作を思いついたとするなら、*Armance* における主題の二重性（あるいは分裂）の一部を説明できないだろうか。作品の構造からすれば、*Armance* は *Olivier* に殆んど似ておらず、初期の戯曲 *Les deux Hommes* に極めて類似している。ここから STENDHAL が Édouard を読んで作品を意図するとき、*Les deux Hommes* の利用を考えたのであり、*impuissance* の主題はその後から来た、その結果、外部の障害に対する主人公の苦悩と内部の障害に対する主人公の苦悩という二つの異った主題をもつことになったと考えられないだろうか。後から来たということは勿

論、付加的、偶然的な些細事であるということではない。逆にそれが強い motif となったからこそ作品は急速に結晶できたのだ。なぜなら、それは *impasse* の状況にあった彼の実生活に深くかかわっただけでなく、彼が興味をもって観察していた貴族青年の閉塞の状況における無気力の象徴とも思われたからである。更に極限状況における情念の追求は、彼の文学理念でもあった。

したがって *impuissance* の設定は、作家 STENDHAL にとって、様々な意味で必然性をもつものであったといえる。だがそれが様々な意味を担うことは、逆に恣意性をもち、論理の一貫性を崩す危険をも内包することであった。

以上のように *Armance* の énigme は、既にある主題の意図をもった作品（これは勿論頭の中だけであったが。あるいはむしろ、*Les deux Hommes* の中に大枠が描かれているといった方がいいかも知れぬが）に新しい主題が外から持ち込まれたことと *impuissance* が様々な意義の複合体として使用されたことから生じたのだ。

*Armance* は二つの時期に分かれて創作された。*Olivier* の刺激の強く働いた第一期においては、病理的モメントとしての *impuissance* が強調され、かなりの期間を置いて書かれた第二期には、むしろ一般的象徴的な意味が前面に押し出されてきたと思われる。Bucci 本の書き込みに見られる最初の plan が病理的 *impuissance* を前提としていること、完成後の自作の弁護を、同時代の貴族青年が Octave に類似すべき必然性に置いていることが、それを傍証してくれるように思われる。以上が大体的見透しであるが、次に具体的に検討してみよう。

## I Impuissance の意味

*Armance* の鍵は *impuissance* であるとされている。だが STENDHAL は、Octave の行動をすべてこの鍵で説明しているだろうか。例えば次のような説明がある。

Elle, sans se le bien expliquer, sentait qu'Octave était la victime de cette sorte de sensibilité déraisonnable qui fait les hommes malheureux et dignes d'être aimés. Une imagination passionnée le portait à s'exagérer les bonheurs dont il ne pouvait jouir. S'il eût reçu du ciel un cœur sec, froid, raisonnable, avec tous les autres avantages qu'il réunissait d'ailleurs, il eût pu être fort heureux. Il ne lui manquait qu'une âme commune.<sup>3)</sup>

初めに elle 即ち *Armance* を引き合いに出しているが、「S'il eût reçu du ciel un cœur sec, froid, raisonnable, …il eût pu être fort heureux. Il ne lui manquait qu'une âme commune.」という判断は、明らかに作者 STENDHAL のものである（V. BROMBERT は *Stendhal et la Voie oblique* の中で、作者介入の典型的例として、この文を引いている<sup>4)</sup>）。そしてこの前後の文章は、高貴な魂が俗衆の間で孤立し、苦しむ、あるいは階級的孤立感が主人公を憂鬱ならしめているという印象を読者に与えるものである<sup>5)</sup>。

les yeux d'Octave exprimaient tant de possibilité d'aimer et quelquefois ils étaient si tendres!<sup>6)</sup>

Des médecins, gens d'esprit, dirent à Madame de Malivert que son fils n'avait d'autre maladie que cette sorte de tristesse mécontente et jugeante qui caractérise les jeunes gens de son époque et de son rang;<sup>7)</sup>

Les médecins pensaient que cette monomanie était tout à fait *morale*, c'était leur mot, et devait provenir non point d'une cause physique, mais de l'influence de quelque idée singulière.<sup>9)</sup>

上記の諸例は, *impuissance* を否定するものとして, MARTINEAU, GIDE, ALBÉRÈS<sup>9)</sup>も引用している。この例から見るならば, Octave は恵まれた地位にありながら, 明晰な精神と寛大な心情の持主であるため, 周囲の俗悪さになじまず, そうした精神的孤立感から *misanthrope* になり, 時として Hamlet のような狂気の様相を呈することになる。そしてこのような観念は浪漫派の作家が好んで取り上げた主題であり, この説明は, それはそれで十分納得できるのであり, *impuissance* で説明しなければならぬ必要性は全くない。のみならず STENDHAL は具体的な日付をもつ政治的状况をもち込むことによって, Octave の行動がいかに貴族の没落感にもとづくかのように書いており, 今日この要因を無視する研究家はないであろう。

にもかかわらず, やはり病理的のケースとしての *impuissance* を否定しては, Armance との恋の過程での苦しみが説明できない。更に, この作品のユニークさは, 口に表現できない, 絶対的な障害のために不可能な恋の物語である点にある。STENDHAL の他の作品では, 主人公は牢獄でも, 修道院でも, 一切の外的な制約を無視して, 内的な欲求を実現する。それに対して, Armance の障害は内部の障害であり, 他の小説の主人公以上の内的な勇氣を必要とし, これを描くことがその意図であった。

このように *impuissance* は生理的, 社会的の両義に用いられている。この際, 生理的な面で首尾一貫した整合性をもち, その上で, これが社会的な意味をもつことを暗示するなら, それで辻つまがうのであるが, その点は恣意的であり, 更に時とすると, 上述のように生理的 *impuissance* の存在自体を否定する文章を見出すので, 読者は戸惑うのだ。ここでは明らかに二つのテーマが分裂して存在する。一つは高貴な魂が俗衆に迫害されて, 亡び去ることへの *élégie* (浪漫派の主題), 他の一つは内的絶対的障害を克服せんとする勇氣の表現 (CORNEILLE の主題) である。

こうしたテーマの分裂は, 筋の展開の上にもはっきり特徴づけられている。即ち, 主人公は *impuissance* で苦しみながらも, その自殺は外部の悪意によってひき起こされるのであり, 決して *impuissance* によるものではないということである。確かに *impuissance* の意識で苦しみはするが, 彼がそれを Armance に告白しようとする段階では, 自殺は全く考えておらず, それは偽手紙によってひき起こされるのである<sup>10)</sup>。

Il était mort au monde. Depuis l'inconstance d'Armance, les hommes étaient pour lui des êtres d'une espèce étrangère. Rien ne pouvait l'émouvoir, pas plus les malheurs de la vertu que la prospérité du crime.<sup>11)</sup>

いわば人間への不信が直接的な自殺の原因なのである。

小説自体に内包されている矛盾は以上のとおりであるが, この他にも幾つか考察の手掛りとなる資料がある。それを検討してみよう。

STENDHAL は BUCCI 本に Armance の plan を書きとめている。それは «Le protagoniste est troublé et enragé, parce qu'il se sent impuissant, ce dont il s'est assuré en allant chez Madame Augusta avec ses amis, puis seul, etc.»<sup>12)</sup> という前提に立っている。彼は結婚せざるを得ない破目になり, «un défaut physique comme Louis

XVIII, M. de Maurepas, M. de la Tournelle<sup>13)</sup>を手紙で告白し、結婚し、自殺を遂げる。《il se sent impuissant》とあり、impuissant であるとは断定していないが、少なくともそれが生理的意味で設定されていることは明らかである。そして結末は、《il épouse et se tue》と、一見いかにも首尾一貫しているように見える。だがここには、既に述べたような重大なトリックが隠されている。主人公は impuissant であることに絶望して死ぬのではなく、外部の悪意によって、恋人 Armance への信頼を崩されることによって死ぬのだ。つまり本質的には《se tuer》ではなく《être tué》なのである。このように plan は筋の展開の上で整合してはいないが、一応生理的な意味での impuissance が明瞭に前提されていることを確認できる。

STENDHAL は1826年12月23日、MÉRIMÉE 宛の手紙で Armance について考察を加えているが、そこでは上述の生理的意味での impuissance (Babilanisme) が一層はっきりと述べられている。

J'ai pris le nom d'Olivier, sans y songer, à cause du défi. J'y tiens parce que ce nom seul fait *exposition* et *exposition* non indécente. Si je mettais Edmond ou Paul, beaucoup de gens ne devineraient pas le fait du *Babilanisme*.<sup>14)</sup>

この手紙は一貫して balilanisme の観点から論じており、病理的ケースを取扱っていることは疑を入れない。

STENDHAL は Armance の《Avant-Propos》においても、この問題に触れている。その中で彼は《En parlant de notre siècle, nous nous trouvons avoir esquissé deux des caractères principaux de la Nouvelle suivante.<sup>15)</sup>》といている。《deux des caractères principaux》というのは、モデル探し、即ち鍵の必要性 (besoin d'une clé) の問題と政治性の問題である。STENDHAL は表面的には鍵の必要性和作中の政治的意見の責任を拒否している。だが有名な鏡の譬による、政治批判への責任の回避が、ARAGON のように政治批判の必要性の強調であるとすれば、それと同様この鍵の必要性の否定も、逆にその存在を浮き立たせているのである<sup>16)</sup>。したがって STENDHAL は、この小説について二つの側面、生理的モメントと政治的モメントがあると主張しているわけだが、実際に《Avant-Propos》を読めばわかるように、この二つの中、MÉRIMÉE 宛の手紙で言及されなかった政治的問題の方に比重がかかっている。

ところで1828年6月5日、STENDHAL は BUCCI 本の余白に次のように書いている。

Le hasard me fait voir un jeune privilégié qui traverse les Tuileries.

Je trouve le caractère d'Octave, en tant que jeune gentilhomme vivant au milieu des discussions de 1828, fort bien peint...

Un jeune Montmorency en 1828 est:

1. ou Jésuite
2. ou officier de la garde montant à cheval et spirituel comme son cheval.
3. ou triste comme Octave, car il y a contradiction entre ce qu'il estime et ce qu'il prévoit de sa vie future.<sup>17)</sup> (下線筆者)

この引用文でみられる限り、生理的 impuissance は殆んど問題とされず、1828年の貴族青年の価値観と未来の見透しの間の矛盾として捉えられている。《Le contraste entre

les actions qu'il regarde comme estimables et les actions à travers lesquelles il prévoit que doit le conduire sa vie future》<sup>19)</sup>あるいは《Quoique non impuissants, les jeunes privilégiés comme Ch. de Rohan sont ou jeunets ou *aussi* malheureux que l'impuissant Octave.》<sup>19)</sup>という記述をみるならば、彼の関心が、生理的なものよりもむしろ社会的、階級的なものに向けられており、彼のねらいは caste の閉鎖性による貴族青年の tristesse を描くことにあったように思われる。更に《Où est le jeune homme qui, sans devenir fou, pourra supporter la contradiction entre ce qu'il estime et ce qu'il prévoit de sa vie future?》<sup>20)</sup>ともいっているが、これは極めて注目すべき記述である、fou が babalanisme でなく、階級的矛盾から来ていることを示しているからである。

ところで STENDHAL は *Armance* を評価しない読者に対し、次のようにして自作を擁護している。

Il me semble délicat comme *la Princesse de Clèves*.<sup>21)</sup>

Tous le disent mauvais, Fiori, Besançon, Azur, Sister. Seule excuse of the author what should they say of the Princesse of Clèves.<sup>22)</sup>

彼は1828年4月20日付の *New Monthly Magazine* の記事においても、数カ月前になくなった DURAS 公爵夫人を追悼しながら、《nuances délicates des mœurs》を描くことを《tâche du romancier》と強調し、DURAS 夫人のその点での力働を高く評価しているが<sup>23)</sup>、彼の *Armance* の読者への最も強い不満は、自作が捉え得たと自負しているこの délicat な味わいを評価してくれないことにあった。

かくして STENDHAL の読者に対する不満は二つの点に集約される。一つは nuance délicate を理解してくれないこと。他の一つは貴族青年の生態を Octave の中に十分客観的に描き出しているのにそれを理解してくれないことであった。彼の不満はこれら二つの点にあるのであって、主人公の生理的 impuissance を読者が deviner してくれなかった点については全く不平をもらしていない。ということは生理的 impuissance は STENDHAL にとっては二義的であったととれることである。

以上が STENDHAL 自身の自作に対する意見であるが、ここでもやはり生理的モメントと非生理的モメントがみられ、impuissance は病理的ケース（この場合も実際にそうであるか、そのように感じるかの二通りの可能性がある）と共に比喩的な意味（これも広く浪漫的主人公特有の傷つき易い感受性のつよい魂から階級的不毛性閉鎖性の symbole までの様々なニュアンスをもつ）で用いられていることがわかる。だが M. BARDÈCHE が指摘しているように、この点にこそ曖昧さが生まれる<sup>24)</sup>。両者とも確かに社会の外 (en marge de la société) にいて、外見的な状態では似通っているが、一方は本来自己の病気の故に、自分で自分を閉めだしたのであり、他方は斗争の結果、他者によって閉めだされたものである。BARDÈCHE は exclu と vaincu を区別している。病気の者が、その故をもって社会的不正義を批判しても、それは筋違いであろう。かくして、研究家が論理を整合させようとする時、前述の impuissance のどの側面に力点を置くかによって、*Armance* の様々な解釈が生まれるのは当然であった。病理的 (pathologique) 解釈<sup>27)</sup>、歴史的政治的 (historico-politique) 解釈<sup>28)</sup>、《drame du scrupule et du malentendu》とする解釈<sup>29)</sup>、病気の本質を René のごとき héros romantique の mélancolie とする解釈<sup>30)</sup>、あるいは主題

を視点の転換にありとする (nouveau point de vue sur l'ensemble des choses) 解釈<sup>31)</sup> など、様々なものが、しかも一つに割り切れずに互に入り組んでいる状態である。こうした様々な解釈を許す曖昧さはどこから来るのだろうか。

ところで前述した Bucci 本の書き込み «Le 4 octobre 1826 (...) Lisant *Édouard* je pensais ceci...» は、今まであまり注意されていないが、以上の問題を考える場合、私には見逃せない記述のように思われる。なぜならこの日付は、彼が *Olivier* の名のもとに *Armance* を執筆していた最中であり、彼がわざわざ *Édouard* とことわっているのは、*Édouard* と *Olivier* の差を認めての上であろう。もし *Olivier* でなく *Édouard* の段階で小説を意図したのであれば、それは当然、直接的生理的な *impuissance* は主題として予定されておらず、高貴な精神の俗衆の間での悲劇が中心にあったと思われる。*Édouard* の問題を少し検討してみよう。

## II *Édouard* とのつながり

*Armance* に対する LA TOUCHE の *Olivier* の影響は、*impuissance* の設定の中に歴然と顕われており、それは否定できない事実である。だがこのことは、*Olivier* が出てから、その後で初めて *Armance* が着想されたということを必ず意味しなければならぬものだろうか。*impuissance* の設定を LA TOUCHE から与えられたとしても、それ以前に *Armance* たるべき小説の創作が意図されていたと仮定できないだろうか。それは Hamlet あるいは Alceste のような主人公が、俗悪な精神と妥協できなかったために人生に破れるという浪漫的な主題をもった作品である。そして *impuissance* の設定はあとからきてこの着想に結合されたと考えられないだろうか。両者は確かに鬱屈した精神を描く点では通いあっているものの、悪の所在は、一方は外部に、他方は内部に、はっきり異っているものであった。この本来異ったものが結びつけられた点に *Armance* のわりきれなさがある。主人公の *impuissance* の責任を他者の悪に帰しているのである。

さてさきにあげた «Le 4 octobre 1826 (*the 7th I was absent*). Lisant *Édouard* je pensais ceci. Faites un supplément à La Bruyère, un La Bruyère de XIX<sup>e</sup> siècle, fort bien;» という書き込みの意味するものを少し考えてみよう。以後の考察上の便宜のために一応 *chronologie* をあげておく。

- 1824年6月1日 *Ourika* の書評。(この中で *Valère* 即ち *Olivier* に言及している)<sup>32)</sup>
- 1825年5月1日 Mathilde DEMBOWSKI ミラノで死去。
- 12月1日 *Édouard* の書評。
- 12月18日 *Édouard* の書評。
- 年末～1826年始め *Olivier*, Canel 書店から刊行。<sup>33)</sup>
- 1826年1月18日 *Olivier* の書評。
- 1月31日～2月8日 *Armance* の粗書。
- 9月19日 *Armance* に再着手。
- 10月7日 «...he was very near of pistolet»<sup>34)</sup>
- 10月10日 *Armance* 脱稿。「...Reste à le traduire en style non offensant»<sup>35)</sup>
- 10月18日 «Et pour ne pas ressembler à la *Saint-Barthélemy*... reste à ajouter les traits de sentiment et les actions qui me viendront.»<sup>36)</sup>
- 10月23日 le *first* manuscrit の訂正。

- 12月23日 MÉRIMÉE 宛の手紙。  
 1827年4月～5月 Armance の出版契約。(Canel 書店)  
 8月18日 Le Journal de la Librairie に Armance の広告。  
 11月19日 従弟 COLOMB に訂正用の白紙をはさんだ Armance 数部の製本を依頼する。  
 (BUCCI 本)

STENDHAL が COLOMB に頼んで製本させた Armance 即ち後の BUCCI 本を手に入れたのは、恐らく1828年であるから、それ以前の日付をもつ記述はすべて、記憶か、何物かに書き留めておいたものの転記であろう。1826年10月4日は STENDHAL が二度目の Armance の執筆の最中である。主人公は Olivier である筈だが、彼がわざわざ Édouard とことわらねばならなかったのは、Olivier と区別するためであろう。おそらくこの書き込みは1826年10月4日になされたものであろう(こうした日付けは長く記憶できない筈だから)。そして括弧内の the 7th I was absent は転記の際にでも書き加えたのではないだろうか。10月7日、彼は別の箇所ではピストル自殺を考えている (chronologie 及び注34参照)。それと関係のあることであろう。

従って、上の文の意味するものは「1826年10月4日に、Édouard を読み、創作中の Olivier を LA BRUYÈRE 風のものにするように考えた」ことを後年記録したというのではあるまい。そうではなく、以前に「Édouard を読み、LA BRUYÈRE 風のものをつくることを考えていた」ことを1826年10月4日に思い出して記録したということであろう。つまり10月4日は着想の日ではなく、記録の日であろう。LA BRUYÈRE への言及も、Édouard の書評の載った New Monthly Magazine の前後の記事と一致するように思われる。STENDHAL はそこで、パリの社交界の風俗や政情を語っているのだから。そして彼は1828年 DURAS 公爵夫人が死去した際に書いた記事では «Les romans de M<sup>me</sup> de Duras sont parsemés d'observations dont la finesse ne déshonorerait pas un La Bruyère;»<sup>37)</sup> といっている。STENDHAL は DURAS 夫人をそのようなものとみており、従って LA BRUYÈRE 云々は DURAS 夫人の小説から着想を汲みとったことを物語っていないだろうか。なぜなら、R. LEBÈGUE も «une étude de mœurs, ce qui manque absolument dans l'ouvrage de Latouche;»<sup>38)</sup> といっているように LA TOUCHE の小説から LA BRUYÈRE を想起したのではないと思われるからである。

ところで Édouard はいかなる小説であろうか。STENDHAL の紹介によると次のようなものである。Édouard は平民出身の弁護士だが、名門の未亡人(公爵夫人)を激しく恋する。彼女もやはり同じ情熱をもっていることを知りながら、結婚によって彼女を不幸にすることを恐れ(というのは貴族の位を失わねばならぬから)、アメリカに渡る。彼はそこで名誉の戦死を遂げる。この報せを聞いた未亡人は病になり、やがて死ぬ<sup>39)</sup>。この小説を STENDHAL は次のように評している。

Le sujet du roman est hautement aristocratique. L'auteur peint avec assez d'habileté la naissance et la croissance de l'amour dans le cœur d'un homme timide et fier. Édouard montre un peu de l'indécision et de la folie d'Hamlet. Quoiqu'il reconnaisse l'infériorité de son rang, il est fier de sentir que dans le domaine des sentiments nobles et généreux il est l'égal de sa maîtresse, et qu'ils sont tous deux des êtres privilégiés.<sup>40)</sup>

STENDHAL は実際このようなものとして Édouard を見ていたのであろう。だが私に

は、「l'infériorité de son rang」を「impuissance」に置き換えれば、*Armance* 評として十分通じるように思われる。

H. MARTINEAU は *Armance* が «les phases diverses de la cristallisation» を見事に描き出しており、*Armance* と Octave の恋は «obéit en chacune de ces phases aux lois de la cristallisation»<sup>41)</sup> であるといっているが、「la naissance et la croissance de l'amour dans le cœur」というのは、*Édouard* 評にことよせた彼の創作意図ではなかったか。彼は当時 *De l'Amour* の中で、ユニークな cristallisation の説を理論的に述べるだけでなく、それを *Le Rameau de Salzbourg, Ernestine* の中でフィクション化していたのである（両者共に1825年作<sup>42)</sup>）。彼は恋愛の発生と成長をフィクションによって描きだすことに強い興味を示していたのだ。G. BLIN は *Armance* の遅々とした展開に触れて、「Ce n'est pas la physiologie, mais un certain développement psychologique, de courbe proprement stendhalienne, qui permet ici de justifier le développement un peu lent de l'intrigue.»<sup>43)</sup> といっている。BLIN は恋愛感情の起伏を重視するわけであり、これは結局 *Armance* を «drame du scrupule et du malentendu» とする解釈になる。このように *Édouard* 評の時点で、STENDHAL が «la naissance et la croissance de l'amour» のフィクション化に関心をもち、しかも BLIN のような見方ができることは、*Armance* を *Olivier* よりもむしろ、*Édouard* に近づけるものであろう。

«un homme timide et fier» は Méthilde に対する STENDHAL のあり方であり、*Extrait du Journal de Salvati* や *Roman de Méthilde* において、自己をそのようなものとして描いていた。それはやがて、Octave の *Armance* に対する態度の中に現われるだろう。

Je n'étais pas fait pour plaire à ce que je respecte. Apparemment qu'une timidité malheureuse me rend triste, peu aimable, quand je désire passionnément de plaire.

*Armance* m'a toujours fait peur. Je ne l'ai jamais approchée sans sentir que je paraissais devant le maître de ma destinée. Il aurait fallu demander à l'expérience et à ce que je voyais se passer dans le monde, des idées plus justes que l'effet que produit un homme aimable qui veut intéresser une jeune fille de vingt ans...<sup>44)</sup>

この引用文は Octave の impuissance を否定する有力な論拠になりうるものであろう。*Armance* への愛が成立しないのは impuissant の故ではなく、世故にたけていなかったからだといっているのである。

更に «l'indécision et de la folie d'Hamlet» も *Armance* のものであろう。*Armance* の第2章で Octave が自殺を考えて独白しながら、義務の語につきあたって、飄然生きる決意をする場面から私は、*Hamlet* の有名な «生きるか死ぬか。それが問題だ」という場面を連想するが、私には STENDHAL が Octave の姿の中に Alceste と同時に Hamlet を見ていたように思われる<sup>45)</sup>。これを *Vie de Henry Brulard* の中で、自分を «un fou qui songeait plus à *Hamlet* et au *Misanthrope* qu'à la vie réelle»<sup>46)</sup> とし、更に «Je vivais solitaire et fou comme un Espagnol, à mille lieues de la vie réelle... j'étais fou d'Hamlet»<sup>47)</sup> と記しているのに較べると極めて興味深い。*Édouard* 評における Hamlet を媒介にして、青年時代の STENDHAL 像と *Armance* の Octave が重なり、更にそこから青年時代の自画像である *Les deux Hommes* が浮び上るのである（*Les*



*deux Hommes* と *Armance* を結びつけるものは主人公における *misanthropie* であるが、この点については後述する)。

ついでに言えば、あまり指摘されていないようであるが、Octave の狂気の中に、青年時代の STENDHAL 自身の狂気に近い体験が投影されているように思われる。1805年1月13日 STENDHAL は Victorine MOUNIER に恋文を書いているが、その前後、彼は精神的に極めて異常な状態にあった。1月15日の日記は、自己の愛の状態を分析しているが、精神的にも肉体的にもかなり衰弱していたらしく、途中で «Je m'arrête parce que je sens venir un éblouissement: l'attention et le sentiment sont trop forts»<sup>48)</sup> と書き、更にその欄外に次のように付け加えている。

Avec des sens et des facultés intérieures si mobiles et si sensibles, il est très possible que je devienne fou.

En ce cas, je prie ici qu'on me mène à *Clair*, ce n'est que là que je pourrai peut-être guérir. Qu'on évite toute impression qui me porterait à porter un jugement compliqué. C'est la faculté jugeante qui sera malade, je le sens.<sup>49)</sup>

その暫く後、医学校にいて PINEL の *Aliénation mentale* を読もうとしたり、あるいは CABANIS の *Les rapports du physique et du moral* を読んだりしているが<sup>50)</sup>、これも単に一般的な知識を求めるためでなく、自己の精神状態を確めたかったからであろう。

眩暈によって中断されるこの日記は、その直前に «Cet état mélancolique ne peut être causé, ce me semble, que par une imagination ardente.»<sup>51)</sup> といっており、*«bonheur angélique»* について語ったあと、*«Je méritais mieux que ce que j'ai, le sort est injuste envers moi.»* Voilà ce que je me suis dit mille fois,...<sup>52)</sup> と記しているが、これを *Armance* の第2章の épigraphe «Melancholy mark'd him for her own, whose ambitious heart overrates the happiness he cannot enjoy—MARLOW»<sup>53)</sup> と比較してみると、その発想の著しい類似が注目される。この頃の日記の記述は *Armance* のそれと極めて類似しているのであるが、*impuissance* の設定は、この当時の STENDHAL の狂気に近い状況を写した Octave に客観性、一般性を与えるための都合とも考えられるのである(彼が自己の主観的な感じに客観的な根拠を与えようと努めたことは、*De l'Amour* を見ればわかる)。

STENDHAL は BUCCI 本の書き込みで、«Une âme passionnée comme celle de Rousseau, une vue nette et parfaite du juste et de l'injuste réunies à un grand malheur peuvent mériter la sympathie du lecteur.»<sup>54)</sup> といっている。*Armance* においては、たまたま grand malheur は *impuissance* に結びついたが、彼の真意は、初めから *impuissance* のような限定された、狭い、特殊なケースを描くことではなく、もっと広いものにあつたと思われる。

私はこれまで内容の面から *Édouard* と *Armance* の結びつきを考えてきたが、外部的な状況もこれを支持するように思われる。*New Monthly Magazine* の STENDHAL の論文は、前掲の *Édouard* 評の載った号から «Sketches of Parisian Society, Politics and Literature» という表題をもつことになったが、それは «Faites un supplément à La Bruyère, un La Bruyère du XIX<sup>e</sup> siècle» という意図及び «Quelques scènes d'un

Salon de Paris en 1827」という *Armance* の副題によく重なるように思われる。

従って、*Armance* は、LA TOUCHE の *Olivier* に触れてから、scandale に乗じて、文壇的成功をねらい、自己の内的必然性なしに構想されたのではなく、STENDHAL はそれ以前に心理小説と現実批判の小説を統一する小説を考えており、それが彼自身の記述のように *Édouard* の読書を契機として、具体的な作品の意図となったように思われる。impuissance の着想が作品を現実に進める強い motif となったことは明らかであるが、*Armance* の創作の意図はその以前に発したと見たいのである。

実際 *Armance* は impuissance の設定及び結婚をせざるを得なくなって窮地に落ち入るという状況以外は、殆んど *Olivier* との類似は認められず、むしろ *Les deux Hommes* とは様々な点で強い類似が認められるのだ。

### III *Les deux Hommes* とのつながり

BARDÈCHE は *Armance* における idéologie の影響を指摘し、初期の演劇習作時の方法に近づけて考えている<sup>55)</sup>。こうした類縁は確かに存在するのであり、*Les deux Hommes* と *Armance* を結びつける一つの根拠になるであろう<sup>56)</sup>。ALBÉRÈS は Octave を idéologue として扱っている<sup>57)</sup>が、いずれにしろ、*Armance* が彼の前期の文学的活動と関係の深いことを示すものであろう。

*Armance* は STENDHAL の創作活動全体から見ればただ単に後期の小説創作時代の開始をつげるだけでなく、失敗した劇習作を含めて、前期の一つの集成をなすものであり、前期と後期をつなぐ中間項としての意味をもっている。こうした媒介項としての側面を見ないならば、STENDHAL の前期の活動（特に劇習作）は無意味なものとなるだろう。ということは、*Armance* がどこから生まれたかを不明にすることであり、また STENDHAL の文学活動を初期からの連続として捉える契機を失うことでもある。*Les deux Hommes* が *Armance* に止揚され、生かされた点を、私は強調したいと思う。

次に *Les deux Hommes* と *Armance* の類似を、もう少し立ち入って検討してみよう。

まず主人公 Charles と Octave の類似性は、両者が共に Alceste と philosophe の契機において性格づけられていることに端的に示されている。Charles と Octave における misanthropie は、類似性の最も強い標識であると思われるが、STENDHAL における Alceste 的形象のもつ意義と共に、別の機会に述べてあるので、ここではこれ以上触れない<sup>58)</sup>。philosophe の点については、Charles は ROUSSEAU、HELVÉTIUS の強い影響をうけ<sup>59)</sup>、Octave は HELVÉTIUS、BENTHAM、BAYLE を読み<sup>60)</sup>、他人に philosophe と称ばれ、自らも philosophe の自覚をもっている（先に引用した *Vie de Henry Brulard* の «J'étais fou d'Hamlet» と同じページに «rien de si doux que de vivre à Paris, en philosophe, c'était le mot dont je me servais alors avec moi-même,…»<sup>61)</sup> という記述が見られる。STENDHAL は強い philosophe の自己意識をもっていたことがわかる。だからといって彼の小説の主人公がすべて、philosophe の契機で捉えられているとはいえない。Julien は «Il était loin de juger sa position en philosophe»<sup>62)</sup> と規定されている）。

また例えば軍隊に対する態度をとってみても «Charles dit vers la fin de la pièce qu'il sera militaire parce que c'est le plus bel état qu'un Français puisse avoir

actuellement, mais qu'il ne sera pas un militaire d'intrigue, qu'il ira à l'armée et que c'est là qu'il veut mériter les honneurs par de grandes actions.》<sup>63)</sup> に対し、Octave の方も、《… par exemple son amour pour l'état militaire, indépendant de toute ambition de grade et d'avancement, …》<sup>64)</sup> とある。

これらを Julien の Tartuffe 的形象、Napoléon を崇拜し、36才で将軍という夢想 (Octave は戦争にゆくとき中尉であろうが大佐であろうがかまわないと第1章の冒頭でいっている) と比較してみるならば、Octave と Julien との鋭い対比と共に、Octave と Charles との類似が明瞭になるだろう。(Charles と Octave が aimable, franc, vertueux の契機で把えられているのに対し、Julien は ambitieux, hypocrite で、時として criminel な相貌において把えられている)。つまり全ての STENDHAL の作品の主人公の中で、Octave と Charles ほど類似した人物規定をもった人物はないのだ。勿論一方が optimiste な、他方が pessimiste な色彩をもっているが。Charles と Octave は既に見たように、共に STENDHAL の青年時代の自画像であり、Alceste も philosophe も彼の自己規定であったが、これらは漫然と選ばれた性格づけでないことは、同じく彼の青春を映した Julien とのほぼ正反対の性格づけを見ればわかるだろう。こうした規定は一定の目的にそって、論理的に選択されたものなのだ。

《folie d'Hamlet》《la naissance et la croissance de l'amour dans le cœur d'un homme timide et fier.》を描いているという Édouard 評が、Armance に一層よく適用されていることは既に指摘したが、Les deux Hommes においても彼はそれを意図していた。《Je dois supprimer la naissance de l'amour d'Adèle pour Charles. On ne se marie pas 24 heures après être tombé amoureux de son mari.》<sup>65)</sup> として、演劇における《時の一致》の制約を認めながらも、やはり Adèle と Charles の恋愛を考え、完全なる恋愛の諸局面とは何かを自問自答している。

D[emande].— Quelles sont les parties de l'amour?

R[éponse].— La déclaration... La femme avoue qu'elle aime... La brouille...

Le raccommodement... La jalousie... Le dénouement par mariage ou mort... <sup>66)</sup>

STENDHAL は Les deux Hommes で恋の発生と成長における感情の起伏を描くことをも大きな課題としていた。彼はこの作品の《Préface》の冒頭で、《Le dessin de M. Guérin intitulé le Raccommodement m'a donné l'idée de faire lutter la poésie avec la peinture》<sup>67)</sup> といっている。そもそもが raccommodement が描きたくて着想されたものなのだ。これはやがて Armance の中で十分展開されるだろう。

さらに chevalier de Bonnivet に唆かされた Soubirane の偽手紙が Octave の絶望を引き起し、これが Armance の物語の重要な転機となるわけだが、これは Iago の奸策による Othello の破滅を模したものであろう<sup>68)</sup>。STENDHAL は Les deux Hommes においても Charles の嫉妬の場面を Othello から借りようとしている。Les deux Hommes のノートに次のように記されている。

M<sup>me</sup> V[alabelle]: Cléopâtre, Amurat, Iago.

Charles : Saint-Preux, Othello, Tom Jones.

Adèle : Desdémona.

Chamoucy : *Le Séducteur*, les marquis de Molière, Rosambert de *Faublas*, Blifil.

Delmare : *Le Tartufe*, Iago.<sup>69)</sup>

Étudier les scènes d'Iago et d'Othello.<sup>70)</sup> (STENDHAL はこのページで Charles の «Jalousie et désespoir» をいかにすべきか考えている。)

Imiter d'Othello l'art profond avec lequel Iago rend Othello jaloux.<sup>71)</sup>

(今述べたように STENDHAL は *Les deux Hommes* の創作に際し、絶えず模倣すべき作品を思い浮かべているが、この点からいえば、*Armance* は、主人公において Alceste (その対立者として Tartuffe) を、situation において Othello (その対立者として Iago) を模しているといえる。そして *Les deux Hommes* も Tartuffe に対する Alceste, そして Othello (Iago) の situation という全く同じ構図をもっている。*Le Misanthrope* と *Othello* が青年 STENDHAL にとってどれだけ重要な作品であったかは、次の記述をみればわかる。

J'ai senti cet après-midi, à trois heures, en traversant le château des Tuileries pour aller voir Mounier, combien ce passage d'Othello était sublime: «On dit qu'il y a une noble race de chevaux», etc. ... En en revenant, j'ai bien senti le plaisir de la mélancolie, je répétais avec enthousiasme, ravissement, cet autre passage d'Othello: «C'est là le destin des hommes généreux et des grands caractères que», etc. J'avais une jouissance indicible en prononçant ce mot généreux.<sup>72)</sup>

この日記は、*Le Misanthrope* の一節の引用から始まり、Othello に感動し、*Le Misanthrope* の詩句を繰返し、更に «Mais vivre sans aimer, est-ce une vie heureuse?»<sup>73)</sup> という詩句をも引用しているが、これこそ *Armance* の主題そのものでなかったか。そして彼は «J'ai plus vécu dans cette journée de lundi qu'à Grenoble dans deux mois; et quel commentaire pour Othello, Orosmane et le Misanthrope!»<sup>74)</sup> と記している。前掲の *Othello* の詩句の «noble race» «hommes généreux» も偶然ではあろうが前に引用した *Édouard* 評の «dans le domaine des sentiments nobles et généreux ... ils sont tous deux des êtres privilégiés» の発想に近い。

更に次のような典型的な STENDHAL 的関心も日記にみられる。

Dans les journaux du 23 messidor XII (*Publiciste*, *Journal de Paris*, *Journal du Soir*). Encore un exemple de la catastrophe d'Othello arrivée en Italie, près de Gène. Un amant jaloux tue sa maîtresse, âgée de 15 ans et d'une rare beauté, s'enfuit, écrit deux lettres (monuments précieux, les demander à Plana), revient près du corps de sa maîtresse qui était dans l'oratoire de son père, vers les minuit, et s'y tue d'un coup de pistolet comme il l'avait tuée. Chercher la vérité sur ce fait.<sup>75)</sup>

このようなシーンは後年 Rênal 夫人を射つ Julien に描かれるが、当時 STENDHAL がどのような視点から事件をみていたかがわかる。Othello が一つの判断の基準であったのだ。そして類似の事件に興味をかきたてられただけでなくわざわざ資料を集めようとしていたこともわかる。彼は自己の実現すべき作品の計画を次のように *Pensées* に記してい

る。

1. Les deux hommes;— 2. Hamlet;— D. Garcia;— Othello; —et la φ (La Pharsale) <sup>76)</sup>

青年 STENDHAL の文学的野心が奈辺にあったか端的に示されているが、見方によっては、上記のプラン中、最も強い興味をもっていた三つ、即ち *Les deux hommes*, *Hamlet*, *Othello* が *Armance* の中に実現されているともいえる。)

Octave の敵役の chevalier de Bonnivet と Soubirane は Charles の敵役の Delmare, Chamoucy に対応するものであろう。Delmare が tartuffe moderne として設定されていることは、既に別稿で述べたが<sup>77)</sup>, chevalier de Bonnivet の場合は次の記述が証明してくれるだろう。

le chevalier de Bonnivet, qui vit madame d'Aumale dès le matin, débuta avec elle à peu près comme Tartufe lorsqu'il offre un mouchoir à Dorine afin qu'elle couvre des choses que l'on ne saurait voir. <sup>78)</sup>

以上、主人公、主要な敵役、重要なシーン、恋愛の過程などの類似をみたが、*Les deux Hommes* と *Armance* の関係は、こうした類似よりむしろ作品構造の類似点に最も明瞭に顕われているように思われる。両作品とも大きな筋を取ってみれば、義務感の強い、高潔な、またそれ故、対世間的にみれば Alceste 的であり、強い批判力において philosophe たる青年 (Charles, Octave) が、心の優しい、しかもしんの強い娘 (Adèle, Armance, 両者とも孤児で、伯母のもと、即ち主人公の家や親戚の家に引きとられている) に心を惹かれる。その二人の罫りに、出世 (大臣の娘との結婚) や金 (200万の補償金) をめぐって陰謀が渦まく。二人は、ある時は外部の妨害により、またある時は相互の誤解、くいちがいによる疑惑で、不和になったり、和解したりし、その過程で恋愛感情の起伏が描き出される。野心的な、支配欲の強い女性 (M<sup>me</sup> Valbelle, M<sup>me</sup> de Bonnivet) と共に、この二人の間を温く見守る人物 (Valbelle, M<sup>me</sup> de Malivert) がいるが、他方外部から Tartuffe-Iago 的人物達 (Chamoucy, Delmare; Chevalier de Bonnivet, Soubirane) による決定的な離間工作が仕組まれる。二人ともその罫にひっかり、嫉妬の激情を示す (Iago におとし入れられた Othello のように)。そして最後だけが、一方はこの罫に気付く、めでたく和解して結ばれるが、他方はその罫に気付かず、恋人への不信を消すことができないままに自殺する。青年 STENDHAL の喜劇の理念は «montrer les vicieux malheureux et les vertueux heureux.»<sup>79)</sup> ことであり、*Les deux Hommes* の楽天的な結末は、フランス大革命の残照の下で、ローマの共和主義思想に忠実だった STENDHAL の当然の発想であつたろう。それに反して、苦しい経験を経て、王政復古の閉鎖的状况を痛感していた STENDHAL が *Armance* を出口なしの重苦しい雰囲気の中に描き出したのも、これまた当然であつた。結末の方向は全く正反対である。そして *Les deux Hommes* に全く欠けていたニュアンスが *Armance* にはある。Charles も Adèle も抽象的な規定はもっていても、具体的な相貌を全くもっていないことは明らかである。にも拘らず、この両作品はまぎれもない構造上の同一性を示している (特に人物構成の対応において)。 *Armance* は作品構造の上からみれば、少くとも *New Monthly Magazine* の紹介文からうかがわれる限り、LA TOUCHE の Olivier より遙かに *Les deux Hommes* に近いの

である<sup>80)</sup>。この点からすれば STENDHAL は *Olivier* に触発されて強力な motif をもったとしても、作品の展開は、*Les deux Hommes* の構図を踏襲し、そこで考えていた性格を用いているといえる。

#### IV *Romans de Méthilde*——フィクションへの志向

*Armance* の成立は、STENDHAL における小説の成立ということである。こうした自明のことを今更もち出すのは、他ならぬ小説というジャンルこそ、彼自身にとって、もっとも相応しいものであるということが、STENDHAL にとって、必ずしも自明でなかったからである。つまりジャンルとしての小説を探り当てるまでに、様々の曲折があったのである (M. BARDÈCHE は1820年以後でさえ «Avec *De l'Amour*, on était tout près du roman et des personnages, on était au bord de la création.»<sup>81)</sup> でありながら一向に小説への歩みがみられないことに注目し、«de ses détours, de ses hésitations, de ses reculs.» に驚いている)、この間の経緯を一応見ておく必要がある。

*Armance* の創作は、STENDHAL が44才の時である。彼がそれまで様々なジャンルで作品を残しておりながら (*Armance* は7番目の作品である)、小説に殆んど手を染めなかったことは、今日、彼が小説によって文学史に名を留めていることからすれば、極めて奇異な事実である。

ところで、今日、評伝、絵画史、恋愛論などにおいてわれわれの興味を唆るのは、その中の史実の部分ではなく、フィクション的部分を通じてあらわれる STENDHAL の ego のあり方なのである。とすれば、彼はそうしたジャンルの中に小説をはぐくんでいたわけだが、なぜそのようなまわりくどい道をとらず、直接、小説に向わなかったのであろう。彼は1804年、妹 Pauline に次のような手紙を書いている。

Songe bien que Saint-Preux est un personnage imaginaire, de même que tous les héros de roman. Lis Molière, La Bruyère, l'histoire: voilà l'homme. Apprends par cœur *Cinna*; les rôles d'*Oreste*, de Ladislas, d'*Hermione*, du *Misanthrope*. Cela te portera aux cieux un jour.<sup>82)</sup>

真実の《人間》は MOLIÈRE, LA BRUYÈRE あるいは歴史の中にあり、小説の人物は空想的なものにすぎぬとする彼の小説への不信感は、その後多少変化したとしても、基本的には1820年すぎまで続いていたであろう。後年、細部の真実は小説によってのみ描きだせるとして、その創作に集中した彼が、*Armance* 以前に小説に触れなかったのは、やはり《人間》の真実を描き出せないと考えていたからであろう。上の引用文の MOLIÈRE, LA BRUYÈRE は後年彼が小説を書くときにすら、絶えず意識していた作家なのだ。そして当時、芸術的な小説を書くことが、ROUSSEAU, CHATEAUBRIAND あるいは STAËL 夫人風のものを書くことであったこと、彼の好みにあう、例えば *Tom Jones* あるいは *Don Quichotte* を継ぐ小説は、芸術的に取るに足らず、低迷していたことを見れば、彼が小説に手を染めなかったのは当然といえる。

だが *De l'Amour* において、BARDÈCHE のように彼自身意識しないままに、小説の近くにいながら、それ以後も小説を書かなかったことは、彼が小説に全く注意を払わなかったことを意味するものではない。1821年オーストリア政府による carbonarisme の嫌

疑によってイタリアを去らざるを得なくなった STENDHAL は、いや応なしにフランスの政治社会状況とそれの反映としての文学現象に直面することになるが、*Courrier anglais* を見るならば、彼が小説にも強い関心を示していることがわかる。勿論彼の論評の対象になったものは、小説以外のジャンル特にノンフィクションのものの方が多いが (Napoléon の没落以後ほぼ十年たち、社会状況が一応安定した時期で、大革命期や帝政時代の回想録、歴史的記録が大量に出ていた。STENDHAL は «Nous vivons, dirait-on, l'âge d'or des mémoires...ce genre d'écrit fait actuellement fureur.»<sup>85)</sup> といひ、さきにあげたようにこうしたものの中に《人間》を見出だせるとしている。更に自分自身 Napoléon に従ってモスクワにまでいったのであってみれば一層強い興味をそそられたであろう。例えば SÉGUR 伯爵の *Histoire de Napoléon et de la Grande Armée en 1812* の批評<sup>84)</sup>などは極めて長文の力のこもったもので、STENDHAL はこれに比較できるような小説批評をかいていない。当時彼は SÉGUR 伯の作品のごときものに文学の可能性をみていた<sup>85)</sup>、ほとんど取るに足りない小説を一一拾い挙げてその可能性を探っている点を評価すべきであろう。彼の重視しているのが、風俗小説と心理分析小説の系列であり、ROUSSEAU, STAËL 夫人, CHATEAUBRIAND から HUGO, VIGNY に進む浪漫派の主流でもなく、また当時流行していた SCOTT 流の歴史小説でもなかったことは文学的にかなり保守的であったことを示しているが、彼の感覚からすれば当然であつたろう。(次のような STENDHAL の SCOTT 批判は、彼の浪漫主義批判を端的に示すものであろう。《Le fort attachement éprouvé ou simulé par sir Walter Scott pour tout ce qui touche aux vestiges du passé (d'où son manque d'enthousiasme pour ces innovations et progrès qui tendent à l'amélioration du présent état social de l'homme) lui a d'ailleurs valu les suffrages du parti ultra, ...》<sup>86)</sup> つまり現在の人間の状態よりも過去の幻影の喚起に関心をもちことに彼の批判は向けられている。更に彼にあっては文学批評が政治批判と結びついていることに注意すべきであろう)

*Courrier anglais* を注意深く読むならば、STENDHAL の小説が、PICARD, MORTONVAL, LA MOTHE-LANGON<sup>87)</sup> などの風俗的リアリズムと DURAS 夫人の繊細な心理分析の小説の統一として成立する過程が自然に浮び上ってくるだろう。こうした彼の志向を端的に示すものとして RÉMUSAT の中国文学の紹介に触れた論評をみてみよう。

Quant aux traits de mœurs de la Chine, je n'ai pu m'empêcher de remarquer que les sentiments analogues produisent des effets semblables aux antipodes: en Chine comme en France. Un homme... se dira en lisant les *Deux Cousins*: «Comme tout cela ressemble à ce qu'on voit en Europe!» Un écrivain européen, qui inventerait un ouvrage de ce genre, se serait efforcé, ce me semble, d'éveiller dans l'esprit du lecteur la réflexion contraire.<sup>88)</sup>

当時の浪漫派の作家が東洋文学に différences des mœurs nationales の物珍らしさ, exotique な色彩感などの外面的な価値を求めたのに対し、STENDHAL は人間が地球の対蹠点ですら、感情的 (内面的に) に等しい反応を示す点に注目しているのだ。更に次の批評を見るなら、彼が人間の感情の機微と共に同時代の風俗の忠実な反映を文学の中心的な課題としていたことがわかる。

...ce roman (*Ju-Kia-Oli*),..., peint à mon sens un tableau aussi fidèle des mœurs de la

Chine que *Tom Jones* des mœurs anglaises d'il y a soixante-dix ans... *Tom Jones* et qui, selon moi, vaut à cet ouvrage une place au premier rang de ceux que les modernes peuvent opposer à l'*Illiade*.<sup>89)</sup>

*Armance* が《Quelques Scènes d'un Salon de Paris en 1827》という副題をもつことは、以上のように彼の小説が社会的な critique と心理の romanesque の統一として成立した以上当然であるが、STENDHAL にしてみれば、長い曲折の果てに、ようやく青年時代の課題（彼は1804年7月22日の日記に《Les mœurs et les passions, ou la tête et le cœur.》<sup>90)</sup>と記している）を実現しうる表現形式を探りあてたということなのだ。

論点が多少一般化してしまったが具体的な STENDHAL の創作に戻ろう。*De l'Amour* の中に、*Roman de Méthilde* という奇妙な小説が補遺として収録されている。これは《le seul moyen d'émouvoir qui me reste puisqu'une lettre passionnée serait renvoyée avec colère》<sup>91)</sup>という切端づまった Méthilde へのコミュニケーションの手段として発想されたものであるが（1819年11月4日、4時間ほど書き続けて放棄した）、意識的な小説の創作を意図したものでないだけ、逆に STENDHAL における小説の発生の原型、発想の基本的形態がそこから露わにうかがわれて面白い。

彼はこの小説の原稿の余白は次のように書き込んでいる。

Les caractères extrêmement sensibles et passionnés paraissent ainsi au-dessous de leur mérite et les caractères froids assez animés pour être bien s'élèvent au-dessus d'eux-mêmes, tandis que les caractères passionnés devenant fous par excès de passion doivent sembler pitoyables. Par fierté et pudeur de sentiment je ne puis pas être éloquent pour les intérêts trop vifs de mon cœur; et avec ce que j'aime, ne pas réussir me ferait trop de mal.<sup>92)</sup>

前掲の *Armance* の引用文44との発想の類似が注目されるが、ここに表明されているような自己の真の mérite, 真実を現実の次元で伝えられないもどかしさが、実際のコミュニケーションの手段に名を借りて、フィクションへと赴かせたものであろう。*Roman de Méthilde* はいわば本能的な衝動であって、そこにははっきりした小説創作の意図が欠けていた。それでも Méthilde の肖像と人物関係の発想において、注目すべきものを含んでいる。ここでは既に、真に愛しあえる優れた資質をもった恋人同志が、悪意あるものの手によって（それに恋人間の誤解が重なって）引き裂かれ、そして曲折を経て和解するといった、*Les deux Hommes* にみられ、*Armance* につながる発想がなされている。更に duchesse d'Empoli は TRAVERSI 夫人（Méthilde の従姉）をモデルにしたといわれるが、性格的には *Armance* の marquise de Bonnivet につながる人物である。主人公 Poloski は *De l'Amour* の Lisio Visconti, Salviati につながるが、Octave と同じ行動を示している。Bianca の肖像は、Méthilde を写しているが、殆んど直接 *Armance* につながる描き方を示している。

## V Impuissance—motif

以上の考察から、*Armance* 成立における *Les deux Hommes* と *Roman de Méthilde* の役割を大雑把に次のようにいうことができるだろう。*Les deux Hommes* は骨組、つまり人物構成（これは STENDHAL にあっては単なる人物の恣意的な組合わせではあり



得なかった。それは彼の morale の反映である) を確立したものであり、*Roman de Méthilde* はフィクションへの志向、人物の portrait, 行動の具体的ありようにおいて、いわば血肉を与えるものであった。

しからば *Olivier* による impuissance の idée の借り入れは、*Armance* の創作に際していかなる役割を果たしたのであろうか。BADÈCHE は *Armance* を失敗作と断じ、*«l'erreur de Stendhal est d'avoir accepté du hasard un sujet qui n'était pas dans l'axe de sa pensée»*<sup>93)</sup> といっている。彼は impuissance を sujet absurde というが、果してそうであろうか。確かに病理的次元でのみ問題にするならば absurde であろう。だが今日、この impuissance を閉ざされた精神状況の反映とみることは常識である。とすれば、それでもなお、この主題が absurde で、*«l'axe de sa pensée»* になかったものが偶然に採用されたものといえるだろうか。

確かに *Armance* を *Olivier* との関係でのみ問題にするならば、彼のいうように œuvre de circonstance の印象を受ける。だが STENDHAL が一貫して DURAS 夫人の作品に注目していること、彼女の作品が全て impossibilité の追求であることを知れば、impuissance への興味が際物的な好奇心によるものでなかったことが首肯できるであろう。*Ourika* は人種の差別が、*Édouard* は階級の差別が、*Olivier* は生理的な異常性が愛の障壁となるのであるが、*SAINT-BEUVE* は *«Elle semblait avoir pris à tâche de mettre en scène toutes les impossibilités sociales: l'union d'une négresse avec un jeune homme de bonne famille; le mariage d'un roturier avec une grande dame. On alla même jusqu'à lui attribuer une troisième impossibilité.»*<sup>94)</sup> といっている。

1824年6月1日の *New Monthly Magazine* で、STENDHAL は *Ourika* を評して、*«Elle apprit alors que sa couleur constituait un obstacle invincible à son mariage avec lui…»*<sup>95)</sup> といい、更に *«Le noble auteur, …Valère, …enfermé dans une impasse aussi malheureuse: il ne peut être aimé!»* と続けている。*Valère* は MARTINEAU によれば、*Olivier* のことであるが、STENDHAL は impasse として扱っている。つまり彼は、impossibilité, impasse の状況での愛を描いたものとして、一貫して DURAS 夫人の小説に関心を示しているものであり、impuissance はこれまでの作品の延長上にある極限的な impossibilité のケースであって決して偶然に好奇心からこの主題にとびついたのではない。彼は1828年4月、*New Monthly Magazine* で DURAS 夫人の死を悼み、かなりのスペースを使い、彼女を論じているが、その中の次の文が最も雄弁に、DURAS 夫人への関心がいかなるものであったかを語ってくれるだろう。

*M<sup>me</sup> de Duras a peint les tableaux les plus touchants de l'amour en lutte contre les difficultés et les malheurs. Comme si elle voulait démontrer que «le chemin de l'amour véritable n'est jamais facile», elle a pris pour thème de ses romans les obstacles insurmontables qui menacent le bonheur des amoureux.*<sup>96)</sup>

勿論大貴族の夫人が自らいう *«un défi, un sujet qu'on prétendait ne pouvoir être traité»*<sup>97)</sup> を取り扱うことに curieux であったことは否めないとしても、STENDHAL がそこに読み取ったものは、*«les obstacles insurmontables»* を乗り越えようとする *«l'amour véritable»* の斗いであった。G.BLIN も *Armance* を *La Princesse de Clèves* と比較して *«Les deux romans développent la même situation d'une passion partagée qui se*

heurte à des obstacles insurmontables》<sup>98)</sup>と述べている。つまり病理的ケースとしての impuissance でなく、*La Princesse de Clèves* の如く恋の《obstacles insurmontables》が問題なのだ。そしてこれは STENDHAL 自身の体験に深くかかわるものであった。彼は BUCCI 本に次のように書き込んでいる。

Et venit, et sui eum non receperunt. (MARTINEAU はこれに注記して、《Il vint, et les siens ne le reçurent (Saint Jean, I, XI) —Stendhal a exprimé en effet dans plusieurs *Marginalia* la douleur qu'il ressentit quand il s'aperçut à Milan que Méthilde lui faisait fermer sa porte.》と述べている)。

Mét[ilde] in 1,000 ans, 1819.

La plus grande douleur.

*Three great despairs.*

abandon of Gina.....1817

impossible of Méthilde.....1820

abandon of Menti.....1826

*all by love.*<sup>99)</sup>

*Armance* の執筆が、Clémentine CURIAL (Menti) との恋愛と深い関係があることはよく指摘されてきた。事実、執筆時はこの恋愛の危機的時期を挟んでおり、STENDHAL は《Repris comme remède le 19<sup>100)</sup> septembre 1826, ...》<sup>101)</sup>あるいは《*The 7 octobre 1826 he was very near of pistolet*》<sup>102)</sup>と書いている。

更に《Dispositions morales de l'animal when he was making Olivier...21 octobre 1826》<sup>103)</sup> 《Le désespoir de l'auteur in making the Rue Richepanse n° 10 octobre 182[6] est bien peint page 163.》<sup>104)</sup> という BUCCI 本の書き込みは、日付けからして明瞭に《abandon of Menti》に関するものである。従って Clémentine との恋が強い motif をなしたことは疑を入れない。だがこの作品の初めから Clémentine への恋が強い motif をなしていただろうか。私には最初はむしろ Méthilde への思いの方が強く働いていたように思われる。なぜなら *Édouard* あるいは *Olivier* を読んで、*Armance* を着想する時点において、STENDHAL は Clémentine との関係の冷却に対して、それほど痛切な苦しみを感じていなかったらしいのだから<sup>105)</sup>。従って彼が *Armance* において impossibilité の状況を書こうと意図した時、彼の胸にあったのは Méthilde へのかなわぬ恋であった筈だ。上記の引用文に Méthilde に言及して《La plus grande douleur》とあるだけでなく、《abandon of Menti》より《impossible of Méthilde》の方がより obstacle insurmontable あるいは obstacle invincible に近く、*Armance* の motif に近いからである。*Armance* は恋人に棄てられる物語ではなく、超えることの不可能な障害を超えようとする物語なのだ。前に指摘した、*Armance* の引用文44と *Roman de Méthilde* の原稿の余白の感想(引用文92)との酷似もこのことを示しているように思われる。

更に STENDHAL には、impuissance の実感が Méthilde につながるべき理由があった。彼は *Souvenirs d'Égotisme* において《fiasco complet》の体験を語っているが、それは Méthilde の想念に妨げられたためである<sup>106)</sup>。そしてその経験の後で、実際に《je passai pour Babillan...》<sup>107)</sup>であったと述べている。つまり Méthilde の思い出は babillanisme (impuissance) と連なるものであった。そしてこの後につづく《souvenir》にも Mé-

thilde に近づくことのできなかった彼の impossible の気持がにじみでている。

MARTINEAU は Armance について «Pour l'âme pudique de cette suave jeune fille, il faut peut-être retrouver en elle quelque nouvelle copie de cette fière Méthilde qui avait inspiré déjà les plus frappants exemples de l'Amour.»<sup>108)</sup> といっており、また R. LEBÈGUE も、«Quant à l'héroïne qui aime Olivier, ce ne sera pas une pâle esquisse comme *Emilie de Nanteuil*, mais un personnage copié sur la réalité et vivifié par les souvenirs de Méthilde.»<sup>109)</sup> といっている。

このことは *Roman de Méthilde* の Bianca と *Armance* の Armance の肖像を較べてみると、より一層はっきりするだろう。Méthilde をモデルにした *Lucien Leuwen* の M<sup>me</sup> de Chasteller のいかなる肖像もこれ以上の Bianca との類似を示していないと思われる。

従って motif としての Clémentine と Méthilde のあり方は、STENDHAL 自身の BUCCI 本への書き込みが適切に示しているように、《Impossible of Méthilde》が根源的なものとして最初の motif として働いていたのであり、《abandon of Menti》は執筆の途中で、直接生ま生ましい形で作用したといえるだろう。それを書くことは Clémentine への恋に対しては治療法たりえたのだから。因みに *Roman de Méthilde* の Bianca に似た *Armance* の Armance の portrait が描かれるのは、この作品の最初の部分においてであり、Octave の絶望的な激しい情熱が描かれ、STENDHAL の Clémentine への言及があるのは物語がかなり進行してから（引用文103、104は第7章に関するもの）であることは、この間の事情を反映したものであろう。Méthilde の恋はある程度客観的に（impuissance というフィクションを設定して）ゆとりをもって抱えられたのであり、Clémentine の恋の方は、一度途中で放棄したものを再び取り上げさせ、実際に完成させるほど生ま生ましい直接的な力をもっていたといえよう。

私は今迄 impossible of Méthilde=obstacle invincible=impuissance という図式において考察してきた。*Édouard* 評の «la naissance et la croissance de l'amour dans le cœur d'un homme timide et fier» を中心軸として *Armance* を見る場合、やはり STENDHAL の Méthilde に対する不可能の愛が強い動機をなしているように思われるが（《*Making this Novel I was very mélan [colique].*》<sup>110)</sup> といっている）、勿論 impuissance をこれのみに限定することは出来ない。

むしろ J. Prévost のように «homme exclu du monde par la chute de l'Empire et par la pauvreté, exclu de Milan par un amour sans espoir»<sup>111)</sup> といった方がいいだろう。彼のこうした閉塞感は、やがて社会的政治的な観察に結びつく筈であった。何故なら、1821年、Méthilde への失恋による自殺への誘惑を退けるのに苦勞し、ピストルの絵を下手な恋愛ドラマの余白にかきつけていた彼が、それを思いとどまったのは «curiosité politique» のためであると *Souvenirs d'Égotisme* で語っているように<sup>112)</sup>、STENDHAL は政治的興味なしには過せない人間だったのだから。こうして私的な実感が、社会的見方と結びついた時、*Armance* は胚胎したといえる。

かくして impuissance は生理的にも (*fiasco complet*) 心理的にも (Méthilde, Menti) 社会的政治的にも (自己の社会的状況—STENDHAL は帝政下では栄達が約束されていた—と彼の観察する王制復古下の貴族青年の無力感) impossible の象徴であり、結節点であった。*Édouard* によって触発された意図は *Olivier* の impuissance によって motif を獲

得したといえる。

更にこれを彼の文学的理念からみるならば、極限状況における最大の情熱を描くことが、彼の青年時代の劇作 *Hamlet* 以来の美学であった。例えば «qu'il éprouvât le plus grand malheur qui lui puisse arriver,…»<sup>113)</sup> «Qu'elles sont les circonstances propres à porter chaque passion à son maximum?»<sup>114)</sup> と記している。従って GIDE が «il semble que Stendhal ait voulu nous montrer que l'amour le plus vif sera celui qu'insurgera la traverse la plus profonde: de tous les amoureux de Stendhal, voici le plus fervent peut-être.»<sup>115)</sup> というとき、*Armance* が STENDHAL の青年時代からの文学的理念の忠実な実現であったことがわかる。

従って、*impuissance* の設定は、STENDHAL にとって、A. CARACCIO が «Cette époque fut une des plus sombres de sa vie. Quand il s'apitoie sur son héros par le truchement d'un vers de Virgile: Vixi et quem dederat cursum fortuna peregi, il songe à lui-même.»<sup>116)</sup> といっているように、彼の体験に深くかかわるものであり、また文学的理念にも一致するものであって、BARDÈCHE のような、偶然に選択された *sujet absurde* という断定は、私には受け入れ難いのである。だがこの選択が STENDHAL にとって必然的であったことは、必ずしもそれが良い選択であったことを意味しはしない。これがいかなる欠陥をもたらしたかは既に見たとおりである。

## VI 創作時期の問題

以上述べたように、*impuissance* は、生理的、心理的、社会的などの様々な意味において、STENDHAL の実感していた *impossibilité* の象徴となりうるものであった。さればこそ、それは強い *motif* として、急速に作品を結晶せしめたのである。だが *impuissance* のこうした多義性は、その柔軟な使用を可能にする、極めて好都合なものである反面、それだけ論理を曖昧にする両刃の剣でもあった。*Armance* の難かしさのすべては、この *impuissance* の *cohérent* な論理を見出すことにある。*impuissance* の意味が恣意的に転義している以上、それを論理的に整理することは、既に見たとおり、不可能であろう。だがこうした重層的な意味の複合性が、当時の STENDHAL のわりきれない実感をよりよく表現しているのかもしれない。A. CARACCIO は «…à l'abri d'une transposition poussée à l'extrême, l'énigme d'Octave pourrait bien être la propre énigme de Stendhal. Eût-il sans cela aussi bien dépeint les angoisses de son personnage? L'exemplaire de Civita-Vecchia porte cette annotation: «Je relis ce chapitre qui me semble vrai et pour l'écrire il faut l'avoir sentir»<sup>117)</sup> といっている。謎が、つまりわりきれなさ STENDHAL の真実であり、実際に感じたところのことであった。あるいはこれを実感としての閉塞状況における無力感 (*exclu*) と理性的判断としての時代の政治的力関係の認識 (*vaincu*) という、実感と理性とのずれとして考えることもできるだろう。

以上の考察に従って *Armance* における *impuissance* の *énigme* を一応整理してみよう。まず本来 *Édouard* 評のような感受性の異常に鋭いものの指標であった *folie* が、異質な *impuissance* の *folie* と結びつくことによって、こんどは、*impuissance* の与件に筋を整合すべく、異常性が病的なものに拡大されてゆくこと（本来 STENDHAL の描きたかったのは、俗衆と異った *singulier* な人間であり、Octave も *Armance* もまた

*Roman de Méthilde* の Bianca も singulière において mérite を認められている)。次に *Les deux Hommes* の構図を利用することによって、外部の悪への批判と内部の病気が曖昧なままに結びつけられたこと（実は結びつかずに、主題の分裂をもたらす）。特に偽手紙の situation は、STENDHAL にとって強い欲求があった（Othello の印象）わけだが、これが決定的に筋を崩すことになった。更に STENDHAL の内部において、この motif 自体、極めて複雑な内容をもっていたこと。このような要因が重って énigme が生じたと思われる。ところでこの創作が、中途にかなりの期間をおいて、二つの時期に分かれてなされたことも、この énigme を一層増すように作用したであろう。

MARTINEAU によれば、最初の 1 月30日乃至31日から 2 月 8 日の10日足らずの粗書で、ほぼ完成していたという<sup>118)</sup>。BUCCI 本の書き込み «5 juillet 1828. Je déchire l'original fait en neuf jours. Je suis étonné du petit nombre de changements que j'y ai faits en quatre ou cinq mois de travail»<sup>119)</sup> が MARTINEAU の主張を裏付けてくれるように思われる。この粗書は «nécessaire impuiss of making» によって突然放棄され、9月19日に Clémentine への恋心を癒すために再着手され、10月10日にほぼ完成したものである。

ところで第一期の草稿はいかなるものであったろうか。STENDHAL のいうようにほぼそれで完成したものとするれば、大体の筋が一通り書き通されたということであろう。そしてこの間の時間が短かったことを考慮すれば、*Armance* の特徴をなす多くの人物規定は、第二期の草稿に回されたであろう。また *Olivier* への défi として（STENDHAL は1928年の DURAS 夫人論において、*Olivier* に触れて、自分が «braver ce danger» を企てたといっている<sup>120)</sup>）、書き始められたとすれば、執筆当初、生理的意味での impuissance が強い比重を占めていたであろう。*Olivier* という表題をもち、その babilan の exposition を絶対的条件としており、おそらく BUCCI 本の plan に忠実に展開されたと思われる。つまり *Édouard* を読んで漠然と小説の創作を意図した段階においては、Alceste, Hamlet 型の人物の社会的 impasse における folie を描こうとしていたのが、*Olivier* に触発されて具体的に小説を執筆したとき、強い生理的 impasse への偏りをもったということである。

第二期の草稿はどのようなものであったろうか。STENDHAL が9日間で書き上げた第一草稿を処分しながら、殆んど変化がなくて驚いたということは、つまり筋に変化がないということであろう。筋の一部の変更は全体にひびき、最も目立つものであるから。その間の仕事は主として人物規定を微細化し、描写を積み重ねることであった。なぜなら第一草稿で現在の *Armance* に認められるような微細な人物規定を行っていたら、作品は恐らく完成しなかったであろうから（*Les deux Hommes* や特に *Letellier* の失敗の一因は細かな人物規定の堆積に埋れて、筋を導いてゆくことができなかった点にあるのだ）。ところで STENDHAL は *Armance* のためには、以前の劇作時のような細かな人物規定をもつノートを作らなかったと思われるが、従って第二草稿で人物規定を微細化する際、自分に最も親しい青年時代の自己（従ってまた *Les deux Hommes* での Charles）あるいは現在の自己の恋情を投影するように向ったと思われる。そして半年の冷却期の後では、当初の défi の意識は薄れて、impuissance をより広く、一般的な意味で（同時代の貴族青年の huis clos を描くこと、またそこに自己の青春を投影すること一更に自己の青春時代の狂気を写し出すことから進んで、そのあまり impuissance 自体を否定する文章をつけ加えるに至ったのもこの過程においてであろう）抱えようとしたであろう（*Olivier* 以前

の *Édouard* に触発された状況に回帰していったことになる)。従って生理的意味での *impuissance* の比重は減じたと思われる。Bucci 本の plan には生理的 *impuissance* が必要不可欠の前提となっているのに、彼の自己弁護が比喩的な意味で、貴族青年が良く書けている点にあることは、こうした意図の移動を物語っていよう（つまり後になるほど比喩性が強まるのだ）。ところで STENDHAL 自身は、この変化が不都合を生ずることをあまり考慮しなかった。なぜなら筋が殆んど変らなかったからである。だが付加される人物規定は生理的 *impuissance* の傍証でなければならぬのに、逆に一般化され、比喩的なものとなり、筋と矛盾してゆく。つまり筋の方は当初のとおり *impuissance* を前提とし、人物規定の方は一般化して、その間の矛盾を深めたのだ。ところでこのように人物規定が逆コースをすすめたとすれば、それは PRÉVOST が «*si Armance est une énigme, l'auteur n'a pas voulu en faire une énigme*»<sup>121)</sup> というように、生理的 *impuissance* の énigme は STENDHAL にとって大した重要性をもたなくなったためとみられる<sup>122)</sup>。

しからば小説完成後の1826年12月23日に MÉRIMÉE に宛てた手紙が *bablanisme* について語っているのは何を意味するのだろうか（しかもこれが最も強い鍵の証拠になっているのだ）。それはおそらく、STENDHAL が自己の内部の意図の変化を、他人に説明するほど明瞭に自分自身で感じていなかったからに違いない。彼は第一草稿と第二草稿に自分では殆んど差異を認めていない。その差異というのはおそらく筋に関するものであろう。つまり筋は変化しなかったのだから、人物規定のぬり重ねが小説の質を変えたとは思わなかったのだ。そして小説を他人に説明する場合、一番先に取り上げるのは筋である。つまり *impuissance* を前提条件としている最初の plan に副って *bablanisme* が問題になったのであろう。のみならず、この cynique な手紙には、あるいは秀才の MÉRIMÉE を *mystifier* しようとする気持が全くなかっただろうか。この手紙のあまりに *gaillard*, *égrillard* な調子は、彼の秘かに自負する *La Princesse de Clève* と同質のデリケートな調子とあい入れないように思われる。この手紙は STENDHAL のデリケートな気持を才はじけた MÉRIMÉE に対して *dissimuler* する *masque* ともとれる。PRÉVOST の «*Les questions qu'on lui a posées, les réponses qu'il a faites (en particulier la lettre cynique du 26 décembre 1826 à Mérimée sur les impuissants) ont contribué aussi à égarer les critiques, et sans doute l'auteur lui-même, sur ce qui doit faire l'essentiel du livre.*»<sup>123)</sup> という指摘は本質をついているように思われる。

最後に *Armance* の方法と初期劇習作時の方法との関係について考察してみたい。BARDÈCHE は BALZAC の小説の場合、歯車仕掛けのようなもので、一度人物が設定されれば、それが相互にからみあい、そのメカニズムの中で、必然的な事件が筋を展開させてゆくの比し、STENDHAL の小説の方は、感覚の所与をつみ重ねて作りだされる CONDILLAC の像のように、*étendue du caractère* を示す事件がつみ重なることによって *composé social de certains éléments* たる中心人物ができるといっている。BALZAC が *dramatique* であるのに対し、STENDHAL は *modeleur* として創作するという彼の指摘は適切であろう<sup>124)</sup>。

ところで青年時代の STENDHAL はこの方法の忠実な実行者であり、例えば *Letellier* などにおいて人物の膨大な *dossier particulier* と *répertoire* を作ったのであるが、BARDÈCHE は *Armance* の創作に際しても、*Letellier* と同様な方法がとられたとし、周到な準備を予想している。彼は初期の方法の継続の面を重視しているわけだが（«*Stendhal*

est-il trop proche encore de son laboratoire d'idéologue»<sup>125)</sup> «l'effet de l'idéologie sur la conduite du roman»<sup>126)</sup> «le géomètre gêne romancier»<sup>127)</sup>), 私はむしろ初期の方法からの離脱の面を考えたい。特に最初の草稿では、おそらく幾つかの *pilotis* (例えば *Bucci* 本に残されている *plan* に似たようなもの) を頼りに、かなり即興的に創作したのではないだろうか。なぜなら既に述べたように、相互に矛盾する、多数の規定を初めから相手にしたのは、おそらく一箇の作品にまとめられなかっただろうからである。特に *STENDHAL* の場合、*BARDÈCHE* 自身指摘するように筋の展開が下手なのである。従って、*MARTINEAU* が言うように僅か 9 日間執筆された第一草稿がほぼ完成したものであったとすれば、おそらく複雑な人物規定や筋に関係のないエピソードは後廻しにして、筋を書きとおしたということであろう。これらのものは第二草稿において付加されたのだ。しかもこれが彼のフィクションの最初のものであってみれば、今まで蓄積されたものが、必要の度を超えて、洗いざらい投入されていったのではなからうか。こうしたものが最初にあったのでは、おそらく、あり余る程の *dossier* と *répertoire* の中で身動きのとれなくなった *Letellier* の轍を踏んだものと思われる。

のみならず微細な人物規定や恋愛の展開過程も、事新らしく *dossier* を作るまでもなく、自己の青春の体験、あるいは *Métilde*, そして現に彼を苦しめていた *Clémentine* との恋愛の体験を投与すればよかった(こうした体験の投与が、カタルシスとして、彼のいわゆる *remède* たり得たのであり、少くとも引用文 103, 104 にみる限り、例えば第 7 章の心理描写が *Clémentine* との危機において、ということは第二草稿で、展開されたことを示している)。貴族社会の生態といっても、特別調査しなくとも平常の観察から(彼が熱心に観察していたことは *Courrier anglais* で明らかであるが) 自然に蓄積されたものであり、それ以上のものではなかったと思われる。*BARDÈCHE* が挙げている «un personnage qui est un impuissant, qui a vingt ans, qui est polytechnicien, qui appartient à l'aristocratie, qui appartient au faubourg Saint-Germain de 1827... un amour qui se développe insensiblement»<sup>128)</sup> «un jeune duc, un polytechnicien, un timide, un malade, un scrupuleux»<sup>129)</sup> を描くために特別な *fiche* が *STENDHAL* に必要であったろうか。

勿論 *BARDÈCHE* のいう *répertoire* を否定し去ることはできない。ある程度の覚書なしには創作がなりたないことを当然であるが(例えば *Lucien Leuwen*) それは執筆時に即興的な *invention* を許すものでなければならない。最初にあまり微細な規定から出発することは、こうした *invention* を不可能にするであろう。それにしても基本的な人物について明確なイメージが必要であるが、主人公と人物構成の型については彼は劇習作時から考えていたのであり、今さら調べる必要もなかったのである。*STENDHAL* は *Taine* や *Zola* のような意味での科学的な人物の表現を意図していたのではない。王政復古期の貴族青年といい、*impuissant* といい、*polytechnicien* といっても、すべて自己の主体的な実感にかみあわぬ限り問題にならなかったのである。*impuissance* という客観的な設定も、彼の主体的な実感に応じられなくなると平気で無視されたのであり、それが曖昧さの理由になるわけであるが、彼には *impuissant* な患者を客観的に描き出すことに問題があったのではなく、それに仮託して自己を描くことが問題であった以上当然であろう。従って外面的な類似にもかかわらずカードとノートの方法ではなく、それから離脱し、即興的な創作へ向う面に注意すべきだと思われる(このことは *STENDHAL* が *modeleur* として創作

したと矛盾しないであろう)。初期の遺産は、私には主人公のあり方と人物構成の論理性にあると思われるが、これについては拙稿《STENDHAL の小説成立に及ぼした MO-LIÈRE の影響》で既に触れた。

## 結 論

従来 *Olivier* に密着して考えられてきた *Armance* を *Édouard* を媒介として、一方では *Les deux Hommes* 及び *Roman de Méthilde* に接続させ、作品の構造及び発想の同一性を確認すると共に、他方 *Olivier* のもたらした *impuissance* の motif としての役割を実生活及び文学的理念から検討し、作者によるその受け入れの必然性を確認した。この作品の謎は以上のような異った主題の結びつけ、作者における実感と理性のずれによる *impuissance* の多義性と不適当な適用、執筆時期のへだたりによる意図の移行などの複雑な過程から必然的に生じたものであった。だがこの成立過程はまた、青年時代の文学的活動の一つの帰結として、また *De l'Amour* 以後のフィクションへの志向の到達点として STENDHAL にとって、この作品を創作すべき内的な理由が存在したことを示しているであろう。

### 〔注〕

- 1) *Armance (Romans et Nouvelles I)*, Bibliothèque de la Pléiade p. 1431
- 2) 1827年11月19日、フィレンツェに旅していた STENDHAL は、従弟 Romain COLOMB に、*Armance* を数部、訂正用に白紙を挟んで製本するよう手紙で頼んでいる。彼はそれに訂正や感想を書き込んでいたが、死後、友人の Donatè BUCCI に贈られた。
- 3) *Armance*, p.48
- 4) V. BROMBERT: *Stendhal et la Voie oblique*, Presses Universitaires de France, 1954, p. 7
- 5) 例えば次の文は、心を打ち明ける友人をもたず、孤独であることを憂鬱の原因としている。《Je vois les plus pauvres, les plus bornés, les plus malheureux, en apparence, des jeunes gens de mon âge, avoir un ou deux amis d'enfance qui partagent leurs joies et leurs chagrins. Le soir, je les vois s'aller promener ensemble, et ils se disent tout ce qui les intéresse; moi seul, je me trouve isolé sur la terre. Je n'ai et je n'aurai jamais personne à qui je puisse librement confier ce que je pense. Que serait-ce de mes sentiments si j'en avais qui me serrent le cœur!》(*Armance*, p. 47)
- また次の第 XXII 章の épigraphe は、BAUDELAIRE の *L'Albatros* と等しく、まさしく俗衆に嘲笑される高貴な魂を述べている。《To the dull plodding man whose vulgar soul is awake only to the gross and paltry interests of very day life, the spectacle of a noble being plunged in misfortune by the resistless force of passion, serves only as an object of scorn and ridicule. Degkar.》(*Armance*, p. 136)
- 6) *Armance*, p. 48
- 7) *Ibid.*, p. 31
- 8) *Ibid.*, p. 46
- 9) H. MARTINEAU: *L'Œuvres de Stendhal*, Albin Michel, 1951, p. 350  
A. GIDE: *Incidences*, N. R. F., p. 177  
F. M. ALBÉRÈS: *Le Naturel chez Stendhal*, Nizet, 1956, p. 338, pp. 339~40
- 10) cf. H. MARTINEAU: *L'Œuvres de Stendhal*, p. 350
- 11) *Armance*, p. 187



- 12) *Ibid.*, p. 1428
- 13) *Ibid.*, p. 1429. ここに挙げられている人物は *impuissant* とされている。
- 14) *Lettre de Stendhal à Prosper Mérimée (Romans et Nouvelles I)* Bibliothèque de la Pléiade, p. 190
- 15) *Armance*, p. 26
- 16) L. ARAGON: *La Lumière de Stendhal*, Denoël, 1954, pp. 50~54  
小林正: 『赤と黒』成立過程の研究 (白水社) 1962, p. 223
- 17) *Armance*, p. 1426
- 18) *Ibid.*, p. 1427
- 19) *Ibid.*, p. 1426
- 20) *Ibid.*, pp. 1426~7
- 21) *Ibid.*, p. 1429
- 22) *Ibid.*, p. 1429
- 23) *Courrier anglais III*, Le Divan, pp. 360~61. STENDHAL が DURAS 夫人をどのように見ていたかは ≪『赤と黒』成立過程の研究≫ (小林正) が詳しい。pp. 133~141
- 24) G. BLIN は J. PRÉVOST の考えを敷衍しながら, «s'il n'a pas indiqué plus ouvertement de quelle insuffisance Octave était atteint, c'est parce qu'il avait placé ailleurs son sujet, jugeant l'élément pathologique par lui-même peu déterminant pour la conduite de l'action.» (*Étude sur "Armance"*) (*Armance*. Avec une introduction et des notes par G. BLIN. Édition de la Revue Fontaine, 1946, p. XVII) といっている。
- 25) cf. «symbole précis de la déficience de l'énergie dans les hautes classes.» (A. THIBAUDET: *Stendhal*, Hachette, 1931, p. 97) «Moralement et physiologiquement, ce jeune Octave, si bien doué et si touchant, est une fin de race.» (*Ibid.*, p. 94)
- 26) M. BARDÈCHE: *Stendhal Romancier*, La Table Ronde, 1947, pp. 138~9
- 27) 今日 *pathologique* な次元でのみ問題を考える研究者はいないだろう。Pathologique な側面に關しては, H. MARTINEAU の *L'Œuvre de Stendhal* (pp. 338~345) が詳しい。
- 28) 今日この側面を無視する研究家は殆んどいないであろう。特に *Courrier anglais* と *Armance* の *parallélisme* を具体的に論じたものとしては, M. BARDÈCHE: *Stendhal Romancier*, pp. 133~138があり, «En 1826, Stendhal, préoccupé essentiellement de dresser le tableau de la société aristocratique en France, s'intéressant avant tout à la littérature satirique et descriptive, ne cherche dans le roman que le moyen de faire une peinture satirique des mœurs.» (*Ibid.*, p. 133) と述べ, *impuissant* の *sujet* は口実にしかすぎず, *décor* 即ち社会的政治的背景が *héros* に劣らず関心事であったといっているが, *Courrier anglais* との関係を最も詳細に研究しているものはやはり, ≪『赤と黒』の成立過程の研究≫ (小林正) (pp. 211~232) であろう。
- 29) G. BLIN はこの見解を強く支持している。«Il peut sembler qu'*Armance* possède sa propre justification dans l'absence de toute clef médicale et de toute exégèse sociologique, comme drame du scrupule et du malentendu. La pathétique en vient non de ce que le héros ne peut pas, mais de ce qu'il ne doit pas aimer, puisqu'il s'en est fait le serment. Octave meurt victime non de son impuissance, mais de son caractère et de ses fantômes. (*Étude sur "Armance"* pp. XIX ~XX)
- 30) F. M. ALBÉRÈS: *Le Naturel chez Stendhal*, pp. 338~9. 更に次のようにもいっている。«la véritable maladie d'Octave est une crainte exagérée de lui-même» (*Ibid.*, p. 339) H. MARTINEAU も «Rêveur, sombre, fatal, ce jeune homme a les mêmes violences de caractère et les mêmes sautes d'humeur qu'un Manfred ou qu'un Lara.» (*L'Œuvre de Stendhal*, p. 338)

と指摘している。

- 31) J. PRÉVOST: *La Création chez Stendhal*, Mercure de France, 1951, p. 228. 彼は更に次のように敷衍している。《Il ne s'agit pas d'exposer aux yeux des curieux un cas de physiologie et de médecine mentale. Il s'agit de juger la société, le monde et le bonheur par les yeux d'un être qui se croit séparé sans retour du monde et du bonheur, d'un moine malgré lui, cloîtré au milieu des hommes par son corps imparfait.》(Ibid., p. 228)
- 32) H. MARTINEAU は *Valère* を M<sup>me</sup> de DURAS の *Olivier* としている。従って STENDHAL は impuissance の主題を1824年にすでに知っていたわけである (*Courrier anglais II*, p. 169)。この *Olivier* の原稿はその後 château de Chastellux で発見されている。Marquis de LUPPÉ によると、これは1821年及び1822年の日付けをもった DURAS 夫人宛の手紙の裏面に、時には気ままに、時には念を入れて何度も書きなおした小説とのことである。LUPPÉ はこの *Olivier* が1825年に書かれたとしているが、STENDHAL が1824年6月に *Valère* 即ち *Olivier* に触れていることは、すでにその頃から執筆されており、しかもその途中で、ある人々の間で知られていたことを示すものであろう。(『*L'Olivier de la Duchesse de Duras*, Le Divan, N°250, Avril-Juin, 1944, pp. 266-7)
- 33) H. MARTINEAU: *L'Œuvre de Stendhal*, p. 329
- 34) *Armance*, p. 1427. これは CURIAL 夫人との恋愛がうまくゆかなくなったためである。
- 35) Ibid., p. 1427
- 36) Ibid., p. 1427
- 37) *Courrier anglais III*, p. 364
- 38) R. LEBÈGUE: *Étude bibliographique sur «Armance»*, Librairie Henri Leclerc, 1923, p. 11
- 39) *Courrier anglais II*, p. 333, p. 396. *Courrier anglais III*, p. 364
- 40) *Courrier anglais II*, p. 396
- 41) H. MARTINEAU: *L'Œuvre de Stendhal*, p. 347
- 42) *De l'Amour*, Le Divan, 1957 (Édition Major) p. 485. Notes N°782, N°785
- 43) G. BLIN: *Étude sur "Armance"*, pp. XX~XXI
- 44) *Armance*, p. 186
- 45) 片岡美智氏もこの Octave の場面から、Hamlet の独白の場面を連想しておられる(《スタンダールの人間像》p. 132)。氏はまた同時に Octave の misanthropie にも言及されている。
- 46) *Vie de Henry Brulard (Œuvres intimes)* Bibliothèque de la Pléiade, p. 401
- 47) Ibid., p. 44
- 48) *Journal (Œuvres intimes)* Bibliothèque de la Pléiade, p. 595
- 49) Ibid., p. 596
- 50) Ibid., p. 608
- 51) Ibid., p. 595
- 52) Ibid., p. 594
- 53) *Armance*, p. 38. MARLOW とあるが、前半は Thomas GRAY のものらしい。(『*Armance*, p. 1434, Note) A. GIDE は《Une imagination passionnée le portait à s'exagérer le bonheur dont il ne pouvait jouir.》(引用文 3) という本文中の文章がこの épigraphe を殆んど textuellement に訳したものであることを指摘している。(『*Incidences*, p. 176)
- 54) Ibid., p. 1427
- 55) M. BARDECHE: *Stendhal Romancier*. «la conduite du roman est parfaitement logique» (p. 151) «l'effet de l'idéologie sur la conduite du roman» (pp. 152~3). Letellier との比較は pp. 147~152 に見出される。
- 56) 鈴木昭一郎氏も「*Armance* 雑感」(『外国文学研究』立命館大学, 1960. 12月号)において *Ar-*

mance を *Les deux Hommes* に関連づけて考え(pp. 190~191), 更に『二人の男』や『ルテリエ』で若きスタンダールが scène de raillerie として計画したおおくのシーンを、私はふたたびボニヴェ騎士の筋とはたいした関係もない登場にみるのである。とくに彼がスピラーヌ氏をそのかしてアルマンソの手紙を偽造するあたりは、『二人の男』のデルマールとシャムシーの関係そのままである」(*Ibid.*, p. 194) と指摘しておられる。

- 57) F. M. ALBÉRÈS: *Le Naturel chez Stendhal*, p. 341

ALBÉRÈS は Octave の悲劇を idéal idéologique が naturel をしばりつけた点にあるとしているが、この見方は私には受け入れ難い。もっとも ALBÉRÈS の著書の意図は、*«analyste à la manière des Idéologues»* から *«Conception cornélienne»* (*Ibid.*, p. 10) に STENDHAL の naturel の展開を見てゆこうとしているのであり、彼女にすれば *«toute la conduite d'Octave symbolise l'échec de l'idéal idéologique.»* と見たいのは当然であろうが。

- 58) *«STENDHAL の小説成立に及ぼした MOLIÈRE の影響»* (拙稿) (フランス語フランス文学研究 №11)

- 59) *«Charles Valbelle...Protagoniste, caractère d'Emile. On le nomme le philosophe dans la pièce»*(*Les deux Hommes (Théâtre II)*, Le Divan, p. 88). Charles は *«Vrai philosophe, le caractère d'Helvétius»* (*Ibid.*, p.92) の叔父 Valbelle に教育され, *«la vraie morale, celle d'Helvétius»* (*Ibid.*, p.90) に反することはない。

- 60) *Armance*, p. 50

- 61) *Vie de Henry Brulard*, p. 44

- 62) *Le Rouge et le Noir (Romans et Nouvelles I)* Bibliothèque de la Pléiade, p. 288

- 63) *Les deux Hommes*, p. 89. cf. *«Charles électrisé par la gloire de l'armée du Rhin y court, son oncle le sait et profite de sa fuite pour lui faire voir le superbe spectacle d'une armée de citoyens se battant pour leur patrie.»* (*Pensées I*, Le Divan, p. 181) Charles も Octave も Julien と全く異って、軍隊を野心の場とは考えていない。だが Charles が明瞭に armée de citoyens と patrie を意識できたのに、Octave には守るべき祖国がなかったことがわかる。

- 64) *Armance*, p. 62

- 65) *Les deux Hommes*, p. 86

- 66) *Ibid.*, p. 173

- 67) *Ibid.*, p. 61

- 68) *Le Rouge et le Noir* において、栄達の門口にいた Julien が破滅するのも、Rênal 夫人が jésuite の僧侶にそそのかされて書いた手紙 (*Le Tartuffe* の筋書を書いたような) を読んでかきたてられた激情の発作から Rênal 夫人を射撃したためである。Julien はいわば Othello である。ところで Julien はこのあと Iago をひきあいにして、*«Bien moins méchant que Iago, à ce qu'il me semble, je vais dire comme lui: From this time forth I never will speak word.»* (*Le Rouge et le Noir*, p. 647) という。Julien は自己を Iago に擬しているわけだが、実は Othello であることは、彼が表面的には Tartuffe でありながら、実は Alceste であるのと同じである。つまり STENDHAL は Julien に Tartuffe-Iago の masque をかぶせることによって、外部の Tartuffe-Iago を一層鮮明に浮き上らせたのである。STENDHAL は偽手紙を *L'Abbesse de Castro* においても Lucien Leuwen においても、重要な situation として用いている。

- 69) *Compléments et Fragments inédits*, Presses Universitaires de France, 1955, p. 145

- 70) *Les deux Hommes*, p. 156

- 71) *Ibid.*, p. 176

- 72) *Journal*, p. 662

- 73) *Ibid.*, p. 663

- 74) *Ibid.*, p. 663

- 75) *Ibid.*, p. 515
- 76) *Pensées I*, p. 123
- 77) 《STENDHAL の小説成立に及ぼした MOLIÈRE の影響》(拙稿)
- 78) *Armance*, p. 154
- 79) *Pensées II*, p. 248
- 80) LA TOUCHE の *Olivier* の筋書は、*New monthly Magazine* の STENDHAL の紹介文によれば、ほぼ次のようなものである。*Olivier* は夫を失ったばかりの若いM夫人に秘かに激しい恋心を抱いている。彼は以前にB男爵夫人に好意を持っていたらしい。だが二人は仲違いしてしまう。ところが彼の友人 César de Saint-H がB男爵夫人を恋し、結婚するという。*Olivier* は夫人の操について疑問を表明し、César も結婚をやめると約束するが、結局結婚してしまう。César の新夫人は *Olivier* を憎み、彼がどうしても Émilie という女と結婚せざるを得ない破目におい込む。*Olivier* は法的にも宗教的にも正規の結婚式を行なうが、その夜失踪する。*Olivier* は親戚関係によって23才で大佐になる程境遇が恵まれている点 Octave に似ているが、この小説の人物構成、筋などに *Armance* との対応は認められないように思われる。特に探せば、主人公が *babilan* でありながら結婚せざるを得なくなり、結婚式後、姿を消すという *situation* 位のものである。STENDHAL の批評で注目すべきことは、彼が主人公を *babilan* とはいっておらず、《Seule sa générosité le ruine.》(*Courrier anglais II*, p. 425) と書いていることであるが、何を意味するのであろう。ついでにいうと DURAS 夫人の *Olivier* の方の筋書は、Marquis de LUPPÉ によると次のようなものである。(前述のような事情から STENDHAL は DURAS 夫人の原稿の存在は知っていたが恐らく読まなかった筈である)(*L'Olivier de la Duchesse de Duras*, p. 268) Comtesse de Nangis の Louise は幼友達の Comte de Sancerre の *Olivier* を愛している。Comte de Rieux が恋を打ち明けるが、彼女はそれを拒ける。*Olivier* は嫉妬し、決斗して Comte de Rieux を負傷させる。*Olivier* はこのように愛の証を立てるのであるが、彼女から逃れ、絶望して自殺する。彼女は死のうとして死ねずに、俗世を棄てる。*Olivier* は *babilan* だったのだ。
- 81) M. BARDÈCHE: *Stendhal Romancier*, p. 109
- 82) *Correspondance I*, Bibliothèque de la Pléiade, p. 151
- 83) *Courrier anglais II*, p. 107
- 84) *Courrier anglais IV*, pp. 114~165
- 85) *Ibid.*, pp. 339~343. 1824 年12月18日の日付をもつこの *London Magazine* は当時のフランス文壇の見取図を描いているが、特にpp. 339~343において《*La Révolution commence en littérature.*》としてその見通しを述べている。もっとも文学革命の主体として STENDHAL が希望を託した大革命の世代は彼を唯一の例外として実りをもたらさなかった。
- 86) *Ibid.*, p. 115
- 87) STENDHAL がこれらの作家をどのように見ていたかは『赤と黒』成立過程の研究》(小林正) pp. 144~172 に詳しい。
- 88) *Courrier anglais III*, p. 217~218
- 89) *Ibid.*, p. 219
- 90) *Journal*, p. 520
- 91) *De l'Amour*, p. XII
- 92) *Ibid.*, p. 373
- 93) M. BARDÈCHE: *Stendhal Romancier*, p. 147
- 94) H. MARTINEAU: *L'Œuvre de Stendhal*, p. 328
- 95) *Courrier anglais II*, p. 169
- 96) *Courrier anglais III*, p. 364

- 97) R. LEBÈGUE: *Étude bibliographique sur «Armance»*, p. 8
- 98) G. BLIN: *Étude sur «Armance»*, p. XLIII
- 99) *Armance*, p. 1431
- 100) Pléiade 版(1956)及び Garnier 版(1950) p. 260 の Notes では17となっているが、他の *Mélanges intimes et Marginalia II*, Le Divan, 1936, p.71, H. MARTINEAU: *Le Calendrier de Stendhal*, Le Divan, 1950, p. 223 では19となっており、Pléiade 版の Préface 及び Garnier 版の Introduction でも19になっているので、誤記と考え、訂正した。
- 101) *Armance*, p. 1427
- 102) *Ibid.*, p. 1427
- 103) *Ibid.*, p. 1441
- 104) *Ibid.*, p. 1441
- 105) 1825年暮から1826年初めにかけての STENDHAL の CURIAL 夫人に対する気持は正確にはわからないが、両者の関係があまり良好でなかったことは確かである。H. MARTINEAU は «Il était clair au début de 1826 que le ver était dans le fruit et leur amour menacé.» (*Le Cœur de Stendhal II*, Albin Michel, 1953, p. 84) といっている。だがこの時点では STENDHAL はそれほど突きつめた感情はもっていなかったように思われる。《スタンダールとその恋人たち》(小林正著, 今日社, 1949) の年表によると「1825年11月, クレマンチヌより恨みの手紙来る」(p. 283) とあるが、これによれば *Armance* の着想時においては, CURIAL 夫人との恋は STENDHAL に impossibilité の実感をせまるものではなかったであろう。
- 106) *Souvenirs d'Egotisme* (Oeuvres intimes) Bibliothèque de la Pléiade, p. 1442
- 107) *Ibid.*, p. 1443
- 108) H. MARTINEAU: *L'Œuvre de Stendhal* p. 335
- 109) R. LEBÈGUE *Étude bibliographique sur «Armance»*, p. 11
- 110) *Armance*, p. 1430
- 111) J. PRÉVOST: *La Création chez Stendhal*, p. 229
- 112) *Souvenirs d'Egotisme*, pp. 1429~30
- 113) *Pensées II*, p. 123
- 114) *Pensées I*, p. 159
- 115) A. GIDE: *Incidences*, p. 178
- 116) A. CARACCIO: *Stendhal*, Hatier, 1951, p. 136. なお «Vixi...» は第XXX章(*Armance*, p. 186)に見出される。*Armance* の本文においては, cursum が sortem になっているが, これは STENDHAL の誤り。
- 117) *Ibid.*, p. 137
- 118) H. MARTINEAU: *L'Œuvre de Stendhal*, p. 352, p. 353
- 119) *Armance*, p. 1428
- 120) ここでは STENDHAL は, DURAS 夫人が Olivier を幾人かの友人に読んできかせたが, 作品は主題の性質上出版されることはあるまいといっている (*Courrier anglais III*, p. 365)。即ち, LA TOUCHE の Olivier とは別物であることを読者に認めているわけである。なぜならそれ以前に出版された LA TOUCHE の Olivier の書評を書いているからである。
- 121) J. PRÉVOST: *La Création chez Stendhal*, p. 227
- 122) この点ではむしろ G. BLIN の «Octave est un impuissant. Mais qui nous l'apprendra, puisque sur ce point auteur et personnages semblent garder un mutisme égal?» (*Étude sur «Armance»*, p. XIII) という発言が盲点をついていよう。今日われわれが impuissance を問題にし得るのは, 小説の本文以外の諸資料によって楽屋裏を穿鑿した結果なのであり, STENDHAL の予定した読者は Olivier が Octave に変えられた以上, Octave の impuissance について

何ら手掛りを与えられていない。STENDHAL は一応その *clef* を与えることを試みてはいない。例えば BUCCI 本に «Essayer faire deviner l'impuissance, mettre ici: *et comment en serai-je aimé?*» (*Armance*, p. 1435)と書き込んでいる。だが果してこれから *deviner* できるものがあるだろうか。また STENDHAL は *Armance* の本文の «et Dieu sait, ajouta-t-il en soupirant, s'il n'eût pas été mieux d'être fidèle à ce dessein et de faire de moi un savant retiré du monde!» (p. 35) の部分を BUCCI 本で «Un imitateur de Newton! Car Newton est accusé de babilanisme» と注記しているが、これもまた *savant retiré du monde* から *impuissant* を連想できるものはない筈であり、あまりにも消極的すぎ、自己弁解的であるように思われる。結局鍵らしい鍵を与えていないのは *impuissance* の鍵なくしても、この小説は通用すると判断したためであろう。もし STENDHAL にその気があれば、Olivier に触れるなり、有名な *impuissant* の MAUREPAS に言及するなりして暗示位はできた筈であり、事実 LA TOUCHE の *Olivier* の論評のときには MAUREPAS に触れており、H. MARTINEAU はこの名が STENDHAL の MERIMÉE 宛の手紙にも *impuissant connu* の間に数えられていることを指摘している。  
(*Courrier anglais* 11., p. 424)

- 123) J. PRÉVOST: *La Création chez Stendhal*, p. 227
- 124) M. BARDÈCHE: *Stendhal Romancier*, pp. 147~157
- 125) *Ibid.*, p. 142
- 126) *Ibid.*, p. 152
- 127) *Ibid.*, p. 152
- 128) *Ibid.*, p. 153
- 129) *Ibid.*, p. 148